# ユースワーカーは何をする人なのか

京都市ユースサービス協会常務理事・事業部長　水野篤夫

**ユースワークにおいて実際に若者と関わり、事業を展開するのが「ユースワーカー」です。耳慣れない言葉ですし、日本でユースワーカーを名乗る人は必ずしも多くありません。しかし、これからの若者の成長を支える活動において、欠くべからざる存在だと私たちは考えています。ではどんな人なのかみてみましょう。**

## 1. ユースワーカーって何をする人？

ユースワークの存在は中心的なものです。どんなに良く計画されたプログラムも、ワーカーの持つ能力によって生かされもし、マイナスにも働くのです。21号・22号で説明したようなユースワークの目標の実現のために、ユースワーカーには多様な働き方と役割が求められます。例えば、施設や事業そのものをマネージメントをするワーカーや、若者向けのプロジェクトを企画・運営するワーカー、アートやスポーツなど特定の専門領域の指導を受け持つワーカー。他に仕事を持ちながらパートタイム的に働くワーカー。ボランタリーにユースセンターの活動に参画したり、若者とかかわるワーカーなど様々な形が考えられます。それぞれにおいて、役割や位置づけは異なるけれど、ここでは共通して必要となるユースワーカーとしての基本的な考え方（ユースワーカーらしい考え方）について、筆者が大事だと思うものを箇条書きにしてみましょう。

①常に若者の社会的な成長という視点に立って考えようとする。子どもから大人への移行期を支えるという社会的な文脈の中で若者を見ることと、問題を持った若者にこそ手助けが必要だと考える。

②関わる人々の属性や外見（職業や年齢、性別や文化的背景、信じる宗教、信条、容姿、障害の有無など）を無前提的に受け止めないで偏見なく見ようとする。

③個人と集団、社会システムの間の葛藤や矛盾、対立の中にこそワーカーとして関わるべき焦点があると考える。

④常に実践の中で、自らの持っている枠組み・価値観・感情をふり返って見直していこうとする。

⑤公共の利益のために自らの力を誠実に用いようとする。

ユースワーカーは決して「聖人」ではありません。むしろ〝矛盾や弱さ〟を持った存在です。しかし、ユースワーカーがそう呼ばれるためには、そうした弱さや自分の中の矛盾したものを、ちゃんと自覚して、若者との関わりの中で使っていく必要があります。②にあるように自分の持ちがちな〝偏見〟に気づいていること、④で述べるように自分の考え方の枠組みや価値観を折に触れて見直すことが求められます。若者の問題に直面したとき、ワーカーはさまざまな葛藤に晒されます。「あなたは私よりあの人の言うことを聞いている！」「お前は俺のことがほんとは嫌いなんだろう？」といった投げかけを若者から受けたとき、地域の大人から「若者ばかりなぜ優遇するのか」「やんちゃな若者をもっと〝指導〟してくれ」などと言われたとき等。そんな時にこそ、若者とそれを取り巻く（大人）社会との矛盾の間に立って、若者に寄り添いながらその矛盾や対立に応えていこうとすること（①③）が、ワーカーの「ワーカーらしい」考え方だということになります。そしてそれらすべてに関わって、社会の利益のために働こうとするのがユースワーカーなのだといえます。



## 感受性と技能、そして知識基盤

こうしたいわば信条（マインド）とともに、ユースワーカーはトレーニングによって、状況の中で求められていることを読み取る感受性（センス）と、プログラム活動や個々の若者との関わりを進める上での技能（スキル）、そして若者の成長の仕方についてだけでなく、法制度や社会資源、今の社会で求められていることについての幅広い知識（ナレッジ）を鍛えておくことが必要となります。これらの能力が関連し合いながらワーカーの力を構成するのです。

## いろいろなワーカー

それでは、筆者が出会った印象的なユースワーカーを紹介して、もう少しイメージを具体的にしてもらいましょう。

### 一人目のワーカー（ウェールズのビリー）

ユースワークの〝本場〟イギリスで出会ったユースワーカーのビリーは、ある公営住宅群からなる地区で、「スーパーマーケットも医者もパブもない」「〝ぼろぼろの環境〟と住民が言う」街にあるユースセンターのマネージャーでした。

――ここでの若者の抱える問題は、学校からのドロップアウトや非行と同時に、家庭生活の存在しない子どもも多く、児童の性的虐待や未婚の母になるティーンエイジャーも多いことなどだ。そうした子どもや若者に社会に関わる経験を与える上で、若者が集まる場としてのセンターを、伝統的な男女観と違う考え方を経験させるソーシャルセンターとしていきたい。クラブ活動やコンピューター教室や、国際交流事業にもそうした若者を連れて行きたい――

そんなことを語りながら、地域で問題があるとすっとんでいくワーカーでした。

### 二人目のワーカー（問題を抱えた若者に関わるワーカー）

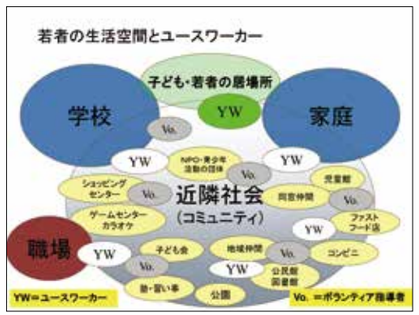
京都の青少年施設で働くある中堅ワーカーは、例えば、近隣のやんちゃな中学生（俗に「ヤンキー」などと言われる子ども達）への最初の言葉掛けについてこう語ってくれました。

――「どこから来たん？」「○○中学？」「へえ、それやったら○○と一緒か？」といった言い方をするが、それは、とりあえず彼らを受容して（どんな突っ張った格好、態度をしていても）、彼らに〝味方だよ〟というメッセージを出すことが大事だと思っているから。それがもし最初に伝わらなくても、そういう姿勢でないと関係ができない。いきなり「たばこ吸うな！」「行儀良くしろ！」と言っても「うるせえ！」と言い捨てて出ていってしまうこともある――

一方で、対人関係が苦手な青年などがやってきたときには、全く違う対応をするといいます。

――最初にやってくるときは、いかにも肩に力が入っていて緊張感がある。来るだけで一大決意という感じだろう。だからことばを慎重に選ぶ。「何してる？」「学校はどこ」などとは言わない。最初は、自分のこと（趣味とかどこで生まれたとか）から話すことが多い。そこで反応が出てきたらいい。一緒にいる時間を経て、やりたいことが徐々に彼らから出てくるようになる。だから、彼らが自分で言うまで背景は問わないが、自分から言い出すと、その背景は驚くような世界であることも多い。リストカットとか、自殺企図などの話が出てくることもある――

どうでしょうか、少しでもユースワーカーの若者との関わりのスタンスが分かってもらえたでしょうか。

## 2. 若者の〝側にいる〟存在としてのユースワーカー

これから望まれることとして、〝若者の生きる場〟で関わるワーカーを増やしていくことを挙げたいと思っています。プロフェッショナルなワーカーだけでなく、地域活動のなか、ボランティア団体や青少年団体のなか、学校のなかなど、若者が居るところであればどんなところでも、多様なワーカーが活動していく形です。デタッチトワークやアウトリーチといった、若者が居る場所（例えば夜の繁華街や駅前の広場といった）に出掛けていって、関わりをつむいでいくやり方も試みていければと思います。このように、若者と大人（社会）との間の関係をつないでいく存在があればもっと、若者にとって大人（社会）が信頼できるものとなって、ともに生きやすい社会を作っていくことにつながるのではないでしょうか。それが、ユースワークが提案する〝目指すべき社会〟と、ユースワーカーの役割です。